

視覚障害者に対する支援の基礎

研修の流れ

- 1 支援理論

スライドと資料を見ながら説明を受けます。

- 2 実習

二人ずつペアになり、
一人はアイマスクをして視覚障害者役、
もう一人は支援者役として
移動支援を中心に実習を行います。
交代しながら行います。

- 3 質疑応答

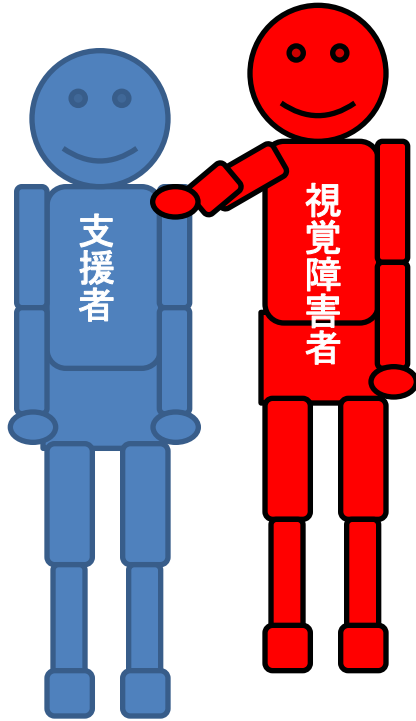
1 はじめに

- 声をかける
- 自分はだれかを告げる
- 握手をする。

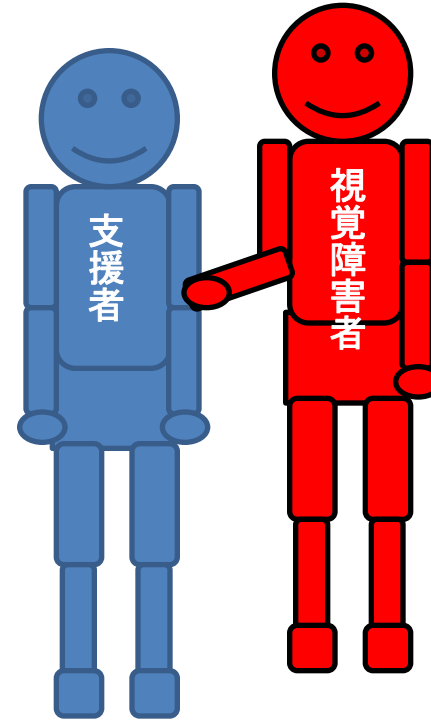
2 移動の支援

(1)基本姿勢

- 肩に手を置く



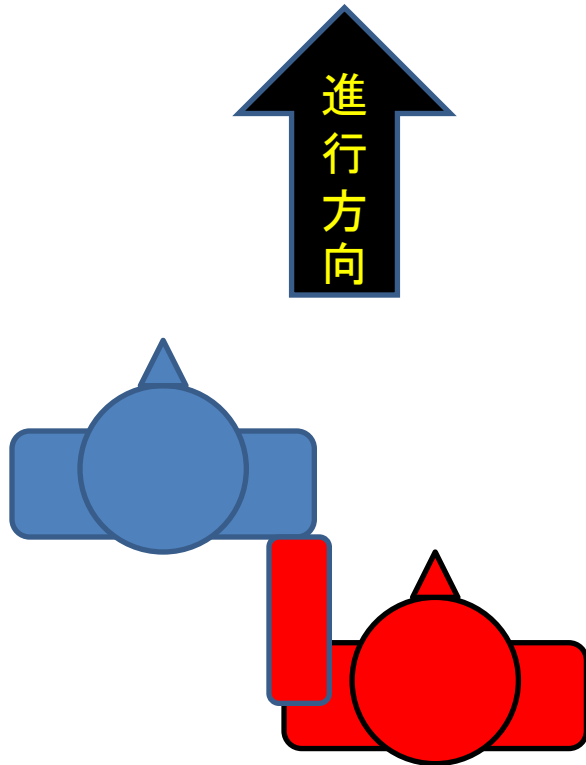
- 肘をつかむ



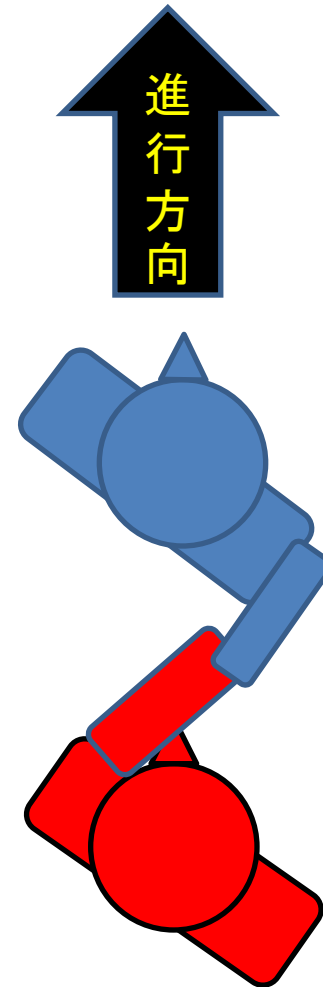
ポイント

- ・支援者は一歩前、視覚障害者は後ろに位置する。
- ・肩に手を置くか、肘をつかむかは、支援者と視覚障害者の身長による。

(2)狭いところを歩く時

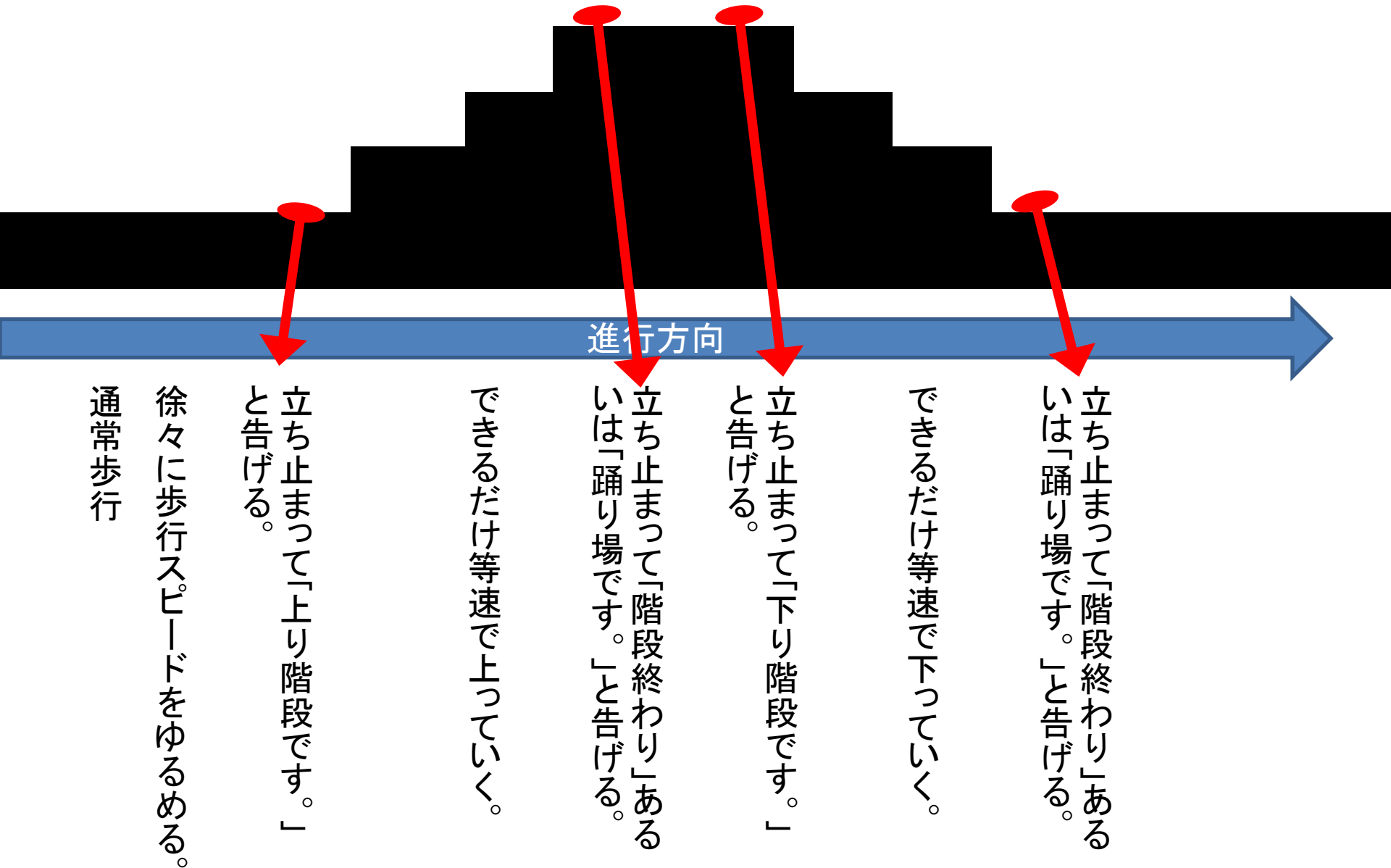


通常は、横に並んで歩く。



狭いところでは、支援者は進行方向に対して体を斜めにし、肘あるいは方を引いて、視覚障害者を真後ろにつける。
歩幅は小さめにする。

(3)階段での支援



(4)ドアの処理

- 引き戸(スライドドア)なのか開き戸(蝶番ドア)なのか
- 引き戸の場合
 - 自動ドアか手動ドアか
 - 「右に引いて開けます。」「左に引いて開けます」
- 開き戸の場合
 - 「右に押して開けます。」「右に引いて開けます。」
 - 「左に押し手開けます。」「左に引いて開けます。」
- 閉める必要があるのかないのか
- のれんの処理

(5)椅子へのガイド

- 背もたれを触らせる。
- シートを触らせる。
- 丸椅子の場合、座る方向が分からないので、方向を案内する。

(6)自動車に乗ってもらう

- 大まかな車種を伝える。
- ドアハンドルを触らせる。
 - 乗る際のドアの開閉は本人に任せたほうが安全。
 - 開いた状態のドアに近づくことはかえって危険。
- 天井の位置を触らせる。
 - 乗る時に頭をぶつけないように
- 降りるときはドアを開けても安全かどうかを伝える。
- 降りたところの安全を確認しておく。

3 ファミリアリゼーション

- 未知の場所、地域、部屋、事物等、目が見えていれば、一目瞭然なことでも、視覚障害者に対しては、言葉を使ってそれらについて説明をする必要があります。
- 視覚障害者が頭の中で対象物をイメージできるように説明するとよいですね。

(1)移動時の説明

- 移動支援をしている間、安全に関する情報を言葉で伝えることはもちろん、それ以外の目が見えている人が普通に受け取る情報をできるだけ、言葉にして視覚障害者に伝えるようにします。

(2)部屋に入った時

- 部屋の名前
 - 部屋の広さ
 - 部屋の特徴
 - 今部屋に誰がいるのか
- といったようなことを伝えます。

(3)方向や場所

- 「あそこ」とか「こっち」といった言葉や、指差しによって伝えることはできません。
- 東西南北といった方向や、起点となる位置をまず決めて、そこを基準に説明するなどの方法が有効です。
- また、初めに最も外側のフレームワークを示しておくとう理解しやすいかもしれません。
- 最終的に視覚障害者の頭の中で地図が作られるように説明をしていきます。

(4)食事

- 時計の文字盤に模して、「7時の方向にご飯があります。」「4時の方向におみそ汁です。」といった説明の仕方があります。
- 「真中におかずがあります。」と起点をまず説明し、その後「おかずの左手前にご飯、右手前にみそ汁、右奥に水です。」といった説明の仕方あります。

4 おわりに

- どのような支援が必要かは、人によって、また時と場合によっても違います。
- こうした支援が特別なスタッフによる特別な技術としてではなく、学生、職員を含めた多くの人によって、普通になされるようになるとういですね。
- 障害のある学生が一般大学に受け入れられたり、安心して学業に励める世界がさらに広がることを期待しています。